

全国学童保育指導員学校 西日本会場 in 岐阜

2022年6月5日

風の子クラブ 川原郁美

全体会では、子どもや保護者、指導員がコロナ禍においてどんな思いをして、どんな影響が出ているのかを知りました。たしかにコロナ禍になり、子どもが我慢をしていたり、ストレスを溜めているのか、今までになかった暴力的な行動や、周りの子どもが嫌がることをする子どもが出てきたように感じます。そんな時に、その好ましくない行動だけを見て「やめなさい」「なにをしているの！」とつい言ってしまいがちだったと反省しました。

あらためて、子どもの行動にはすべて意味があること、どんな背景があるのかを考えて頭ごなしには叱らないこと、「どうしたの?」「どうしたいの?」「どうしてほしいの?」といった対話を大切に、子どもの思いを聞き、受け止めながら保育をすることの大切さを学びました。思いを聞こうとしても、なかなか自分の言葉で話してくれない子には、どうしようかと悩むこともあります。関係性の構築から始めてめげずに取り組んでいきたいとおもいます。

午後の分科会は理論講座第4分科会「しょうがいのある子どもの理解をふかめともにそだちあう」を受講しました。まず初めに驚いたことがあります。特別支援学校、特別支援学級、通級による指導を受けている小学生の多さです。学童保育という子ども福祉の現場で働きながら、いわゆる発達障害と診断される子どもや気になる子どもは多くなっているのではないかと感じていました。実際に数字でみて想像を超える人数に驚きました。

今回の分科会では障害を理解して受け止め、障害を持つ子どもの発達について学びそれぞれの子ども、障害にあった支援を心がけることが必要だと強く感じました。障害特性を学び、理解することは大切ですが、同じ障害の診断名だからといって全員が同じ行動をとるわけでも、同じ考えをしているわけでもありません。障害特性と、一人ひとりの子どもの性格や、子どもにある背景を理解しようとするのが子どもの本質的な理解につながっていくのだと気づきました。

また、どんな物事にもいえることですが、行動やものの捉え方は1つとは限らないことを忘れず、『私はこう捉えるしこう思うけど、あの子はどうなんだろう。どんなことを考えているんだろう、どう思うんだろう』と思いをめぐらせてかかわったり、子どもが壁にぶつかったときに、子どもの目線に立って考えたり、自分が体験した同じような場面を思い返して考えてみたりして、援助の方法を探ることが必要だと学びました。

『自分ならこう、一般的にはこう、だからみんなもそうだろう』といった偏った捉え方をしないように注意して、さまざまな特性のある子どもとかかわり、ともに育っていききたいと思えます。